

浄土

五月号

昭和十四年五月廿四日 第三種郵便物認可 (毎月一
昭和十四年四月二十八日 運輸省 (特別投函認可)
昭和十四年四月二十五日 印刷 昭和十四年



法然上人鑽仰会



生れてはまつおもひ出んふる里に

ちきりし友のふかきまことを

法然上人御歌



宗教と政治

いよいよ参議院選挙も真近かである。創価学会、厳密にいうならば公明党では、立候補者全員の当選を期して、有権者の住民移動をおこない票固めをしているときく。法の盲点をくぐりぬけて、手段方法を選ばぬ強引さに、いささか腹がたつ。公明選挙に泥をぬるやり方は、公明党の名がすたるというもの。かれらは一体宗教と政治の在り方をどう考えているのだろうか。

そもそも近代国家では、宗教と政治の分離が原則となっている。西洋においても中世の暗黒時代は、教会が政治を動かし、それへの反発が分離の原則を生みだした。わが国における戦前、戦中の国家主義の形成と神道の問題を考えてみても、宗教の政治進出には疑問がある。

最近のベトナムの泥沼の戦禍のすがたをみても、事のおこりの一面にはゴンジエンジエム政権の宗教と政治の分離の原則に対するあやまった方策が民衆の怒りを刺戟している。宗教的な熱情がコントロールできないとき、不幸な民族的斗争をひきおこすことになる。創価学会のヒモつきの公明党は多分に危険な要素をもっている。

五部浄

興福寺蔵

五部浄が釈尊の八部衆として興福寺に安置されたときには、まだ東大寺が建てられてはいなかった。だが、日本に根をおろした仏教が日本流に開花した時代に入ったばかりであった。天平期の仏像にはとりすましたものは少なく、いずれも若さと活気に満ち溢れている。天平比との若々しいたくましさ、そのまま仏像にも現われてくるのであろうか。この五部浄も有名な阿修羅像と同じく、のびゆく希望にふくらみながらも、前途に一抹の不安を抱くかのように憂えをおびた顔をしている。新しい時代へと飛躍せんとするとき、希望と不安との交錯を感じ、気持ちの現われを、天平人は憂えに託したのであろうか。

五部浄は仏の道を歩まんと努力する人を守護する役目を仰せつかって、人間の近くにいつもたたずんでいる。言いかえるならば、悩める人々とともに歩み、泣き笑いの人生を送ろうと努力している姿のことである。さながら、いとし子を見守り、愁いをこめた母のように。わたくしを見守る憂いこそ、力をつけてくれるものはない。だが、この五部浄は仏の道に現代人が見向きもしないのを憂えているのかも知れない。

(石上 善応)

— 目 次 —

巻頭のことば 宗教と政治	(1)
随 想	村田嘉久子・栗本俊道.....(2)
— . — . — . — . — . — . —	
浄土問答 靈魂は不滅か	藤井 実応.....(4)
一言法談 生来の檀家	渋谷 賢応.....(24)
— . — . — . — . — . — . —	
印度仏跡を訪ねてあれこれ	塩入 亮達.....(8)
三大学印度仏跡参拝に同行して	上坂元一人.....(16)
近世文名 小林円達僧正	高橋 良和.....(22)
生き甲斐ある人生	(14)
浄土のこよみ	大橋 俊雄.....(26)
仏教人生訓 庇つけぬ心	宝田 正道.....(20)
創価学会手引 選挙に狂奔しはじめた創価学会	(7)
書評 六字の石庭	(32)
新会員紹介	(32)
編集後記	(33)
日本浄土物語 法然の出現	鈴木 成元.....(28)

花柳章太郎さんの最後

村田 嘉久子

(女 優)

昨年の暮もおしつまった廿九日、私は久々で、日比谷の日生劇場の若手歌舞伎に出演がきまって、夜の部一番目の泉鏡花先生のお作「天守物語」の舌長姥を演ることになっていました。丁度その日は舞台稽古の日であつたのです。

朝十時から衣裳は附けずそのまま一回稽古をすませ、再度、すっかり初日通り、衣裳、かつら、すべて附けて演ることになっていました。

ところで、この芝居の衣裳考証で、新派の花柳章太郎さんがご自分も初日間際の忙しいなかを、ひよっこり観客席へ姿を現わされたので、この劇の主役の人びと、扇雀さん、田之助さん、猿之助さんなど、皆さ

「花柳さんが亡くなりました」

と知らせてくれました。そのときはあまり突然で

「へえ……、花柳さんって……？」

と私は言つたくらい。半信半疑で、花柳さんも沢山あるので、踊の方の花柳を名乗つていらつしやる方がたをとっさに誰かしら……と考へたくらいでした。頭取がもう一度

「花柳先生です。新派の……」

と言つたときには、本当に吃驚仰天して、しばらく言葉が出なかつたほどでした。

思へば、はかないお別れでした。しかしまた、何年もかけ違つて、お目にかかつていなかった私にしてみれば、暮れの廿九日、握手されて、

「お互いに体を大事にしよう。たしかおない年だったね」

と言われたことは、大変因縁の深いお別れだったようにも考えられます。

俗に「わずらい上手の死に下手」ということを言いますが、この通りの私に引き換

禽獸虫魚悉有仏性、草木国土悉皆成仏の仏教精神から、如是畜生發菩提心の金言に則るもので、私の寺(東京大塚西信寺)が、多くの動物愛護家によつて、犬や猫など家畜類の供養をひきうけ、そうした動物の墓地を設定した為めである。それらの動物を家族の一員としている家庭が檀家なのである。

いまでは犬猫埋葬を職業とする会社も出来たし、供養するお寺も、回向院、九品仏、浄閑寺、深大寺から、鎌倉の光明寺や名古屋の桃巖寺にもお墓がつくられて、犬猫族にとつて、ありがたい世の中となつたが、大泉靈園という専用墓地を持っているのは私の寺だけであらう。

最近靈園ブームで、武蔵野靈園、東京靈園、富士靈園等々、会社組織の分譲墓地の広告が新聞や印刷物で盛んに出されているが、そもそも靈園の名称は、私の大泉靈園が日本の最初第一号であることは知られていない。東京では青山墓地とか谷中墓地とか多摩墓地とか雑司ヶ谷墓地とか、すべて

ん大喜びで周りを取りまいて、初演のとき
主役「富姫」を演られた花柳さんに、いろ
いろ御注意を受けたり、また質問をしたり
和気あいあいのところへ、私も丁度観客席
へ降りて行きましたので、久しぶりで、花
柳さんにお目にかかり御挨拶をしました。
花柳さんは、いきなり私の手を取り握手さ
れながら

「体はどんなですか。あんたも苦しい？
僕も苦しくって仕様がないう時がある……」
と笑いながら言われて

「兎に角、大事にしましょうや、体だけ
はお互いにね」

と元気な口調でおっしゃったのでしたが、
それがなんと、日生の初日が開いて五日
目、新派の初日の三日目かに、不意にお亡
くなりになってしまいました。今まで其処
にいた方が、不意にいなくなったように、
本当に——不意——と亡くなられてしまっ
たのでした。

私が楽屋入りしたとき、頭取がすぐ部屋
に入ってきて、

えあまりにも忽然と亡くなられた花柳さん
は、これも俗にいう「わずらいべたの死に
上手」というのではないのでしょうか。死
ぬだけは上手でない方がよいと、しみじみ
と思いました。

矢張り無理をして、お苦しかったんだろ
うと思うと、堪らなくお可哀想になります
が、いろいろな榮譽をになって、美しい姿
を舞台に残したまま、それこそ忽然とお亡
くなりになったのですから、俳優として
は、この上ない御最後だとも思います。

後世の御冥福を祈ります。

霊園という名称について

——犬や猫にも浄土のよろこび——

栗本俊道

(大塚西信寺住職)

今日ひがん 菩提の種を 蒔く日かな

春秋の両彼岸に動物慰霊法要をつとめて
今年五十年になる。

墓地の名称が使われ、役所も墓地係の窓口
であった。

動物のお墓を昭和三年大泉村に完備した
とき、動物の霊をとむらう公園墓地という
考え方で人間のお墓と区別して霊園の文字
を使い大泉霊園としてデビューしたからで
ある。東京都が多摩霊園、八柱霊園、小平
霊園からすべての墓地を霊園と改名し、公
園緑地課中にあつた墓地係が、公園緑地部
霊園課という窓口となり、正式に墓地を霊
園と云うことになったことは当時の霊園課
長井上武男さんの話によっても、大泉霊園
より数年後ということである。人間も動物
も一様に霊園に眠り安住の地を得たものと
言えよう。嬉しい仏教精神の表現でもある
う。

米国のライフ誌や英国のタイムズ紙にも
西信寺の動物慰霊祭や霊園が紹介されてお
り、日本人の床しい行事として高く評価さ
れている。

犬や猫にも浄土があるとマスコミは取り
上げている。

随 想

靈魂は不滅か

藤井実応

(浄土宗布教師)

「靈魂は有るでしょうか、無いものでしょうか。」

「靈魂は不滅ですか。」

これに類した質問を時折受けることがある。私はそういう時、質問者の現在の心持を知りたいので、私の方から、いろいろとたずねてみる。

「あなたのいわれる靈魂とは何を指しているのですか。」

「その靈魂を現在はどうな風にお考えですか」と。

そしてその質問者の言葉に応じて私の考えを述べることにしている。

身体の中に何か靈魂という別もの(靈知なるもの)があつて縁にあうことによつて、よく好ききらいをし、是非をわきまえ、苦楽を感じる。死んだ場合、身体は灰になつても靈魂はもぬけて、それがまたかしこに生れてくるから常住であると

考える——これは先尼外道の見解であつて、これを仏法と云うのは、瓦をにぎつて金と思うより、なお愚かであると道元禪師は正法眼藏弁道話に説かれている。

夢や幽霊の話、仮死状態から甦った人の話、死んだ人が他の人間に生れかわつてきたという話、神がかりの人を仲介に死んだ人と對話できる話、等のことが因で、靈魂という物があると考えられたのであろうか。しかしそれらは要するに常識か、想像か、変態心理現象か、或は原始アニミズムの名残等によつて生ずるのであつて確たる根拠があつてのことではない。今日科学を学んだ者の肯えぬことといわねばならぬ。

それなら、靈魂なんてあるものでなく、人間は死ねばそれ迄、灰となり土となつて何もかも無くなつてしまふのか——これも唯物的な考えで、それに満足することはできぬ。

そうすると靈魂は有るでもない、無いでもないということになる。

（もし靈魂を「真實の自己」を指しているなら、それは不生不滅というべきである。しかしその真實の自己とは何か、むつかしい問題であり、真實の自己を靈魂という人は殆どないといつてよいから暫くこの解釈はさしおくこととする）

○

靈魂の有無、滅不滅の質問をうける時、仏の十四無記ということが思い出される。仏陀釈尊は

「世界は常住であるか、無常であるか……世界は有限か無限か……如来は死後存するか存しないか……命と身は一か異か」

等の十四の事柄に就ては無記というて、お答えが無かった。如来の死後の有無、命と身との一異等は、今の靈魂の問題と同質の問題といわねばならぬ。釈尊は何故答えられなかったか、問題そのものが、生れ死ぬ、人生の一大事を解決することにもならず、涅槃に到達する為にもならぬから説かれなかったというのである。

つまり靈魂の有無などという問題よりも前に、それよりも、もっと根本的な人生の一大事、やがて死すべき身であるこの人生を如何に生きゆくべきかという大切な問題の解決に努め

ねばならぬ。この根本が明らかとなれば、靈魂の有無、滅不滅の問題はおのずから解決してゆくであろう。それ故その根本の問題を解決する念仏の信を明にすることが大切である。

○

その事は毒矢の喩の話（中阿含譬喩經）によって一層明かとなろう。

毒矢に射られた人が、射た者は何の種族の人か、如何なる姓名の人か、弓の種類は何か、大か小か、弦は何種の弦か、矢は藤のものか葦のものか、矢鏃は鉄か骨か、毒は何の種類か等々、一々それが分らない間は毒矢を抜かないとしたら、彼は毒矢の毒が体内にまわって死んでしまうだろう。前の十四の問題も同様である。問の解答が得られる間にその命を失うであろう。又これらの客体的な問題は肯定、否定の何れに決定されても、主体的問題である生老病死憂悲苦悩あることに少しも変りはない。問そのものが狂っている。生老病死や憂悲苦悩を離れ、正覺涅槃にも導かない。それ故釈尊は無記と判ぜられたのである。

よく宗教というと、有限と無限との関係であるとか、相対と絶対とのつながりであるとか説かれるが、それは自己を離れて客觀的に宗教とはこういうものだとながめているのである。って学問として説くにはやむをえぬことであるが、実際に生

きている仏教の信は、自己自身の存在が問題になって求められる。この人生ほど大事なものは無いのだが、現在の自身の生活がこれでよいのかと反省され、教を聞き、道を求めずにはおれぬ、そこに新に生活の意義を見出し真実に生きゆくよろこびも発見するのである。真実の自己にも気づくのである。生きた信仰は自己そのものを問題とする主体的立場にあることを自覚せねばならぬ。

○

生死の一大事を中心に道を求め、念仏の信を明かにすれば靈魂の問題もおのずから解決するというのが結論であるが、今一つ、仏教の信を明かにしたいとおもい、解説を加えておきたい。それは私共の現実の生活に、靈魂ともいうべき我執があるということである。心で思うのも、口で話すのも、身で行うのも、私が思い、私が話し、私が行うという「我」の意識が伴う、そこに「我あり」と執する我執ができる。我執はあるが、果してその「我」はあるのか、五蘊（五つの要素）が仮に和合して身となり、心となるというのが仏の教で、「我」という実体はない（縁起所生であり、空であり、仮我である）にもかかわらず、我ありとする我執が残る。もしそれを靈魂というならば、不滅を願うべきでなく、速かにそれを滅して無我の境になることをこそ願うべきである。「梵行

已に立ち、所作已に弁じ、後の有を享けず」が、仏教徒のさとり（羅漢）の境として説かれている。後の有というのは後の存在である。我執のゆえに迷い悩み苦しむ。その我執（靈魂）を滅するのがよろこびであり、願うべきことなのである。その我（靈魂）が極楽に往生するというのでなく、その我が無くなったのが極楽涅槃の世界というべきである。また死ねば灰となって何も無い（これを断見という）というのあやまりである、念仏の信あるところ、念仏者は死すれば却って如来光明中に還相の大活動がはじまる。有縁の人々をそれぞれ守り導く精神的な働き——還相の力となって生きゆくことを実感する。この一事を以てしても、何も無くなってしまふなどという考えはあやまりなることが分る。

念仏の信あるところ即今、如来光明に摂め取られ、現在から如来光明裡の生活をなし、未来また如来光明中に光明と一つとなって、無量寿の活動が与えられる。生死共に如来寿光裡である。生死を超ゆる道は念仏の信である。

好評により三版

浄土宗のおしえ

宮林昭彦著
新書版 二〇頁
価二十五円 一〇

◆五〇部より一割引・一〇〇部より二割引

創価学会手引

選挙に狂奔しはじめた学会

五月の声も間近になってくると、漸やく選挙戦も、前哨戦が本格的になってくる。一般の新聞も、巷間の噂や、統計を駆使して、いろいろと下馬評を始めている。こうした時に、露骨な表現と、運動で動き始めたのが創価学会である。

四月に入って、聖教新聞は、全面的に選挙新聞になってしまった、会長や理事長や、参謀などの幹部会での発言も、「戦いに勝とう」という見出しで、声高々と、選挙への邁進が叫ばれている。一枚めくれば、そこには、次の選挙で出馬を予想されている会員の写真と経歴が、デカデカと広告され、「民衆の代表者」などと宣伝される。声欄にも、各種の記事も、すべてが選挙色一色になってしまった。丁度、選挙前に配布される公約新聞の感が深い。

公明新聞というのがあるが、これはいうま

でも無く、公明党の機関紙である。この新聞が、大々的に選挙戦を報道する事は、まだしもとして、聖教新聞までが、此の様に変貌するとは、驚き入った事である。ここにも、学会の豹変がある。勿論、学会側にしてみれば、決して豹変でなく、予定の行動であるにすぎない。ただ第三者の立場に立って、これを見ていると、その変化ぶりは驚く外無い。

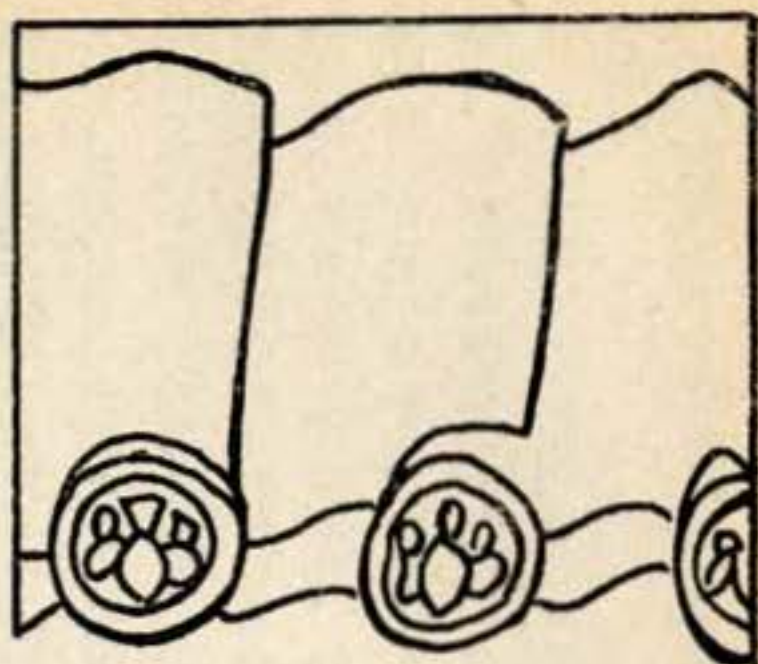
それにしても、気の毒なのは、こうした幹部達の一方的なリードの中で、真面目な大衆が多く、その目的とする事とは反対に引きずられて行く事実である。彼等は、確かに幸福を求めて入会したに違いない。しかし、その幸福が、すべて政治的解決によってもたらされるか、信じ込まされているところに、大きな悲劇があるのである。確かに、現実的な幸福が、或る程度、政治によって実現されることは、確かであるとしても、人間の精神生活

のすべてが、これによって決せられると考える程、愚なことではない。いつもいう様に、政治と宗教は、次元の違う世界なのである。この次元の違う二つの世界を、同一の幸福感で満そうとするところに、大きな矛盾がある。

勿論、学会の主張する矛盾は、ただこれだけではない。数えあげれば、限りが無い。同じく釈尊の教えに立脚した他の仏教諸宗派を邪教とする事自体が、自己矛盾に陥入っている事が、どうして彼等に自覚されないのだろうか。これは、ほんの一例であるが、とも角、彼等の主張はご都合主義であり、自己独善である。そして、時と所によって、どの様にその主張は変化するか、分らないのである。

その最もよい例が、この選挙戦にあらわれている。参議院で地歩を確立すると、忽ち豹変して衆議院にも出、宗教新聞は一転して政治新聞となる。果してこれから、何が出て来るか分ったものでない。

こうした主尾一貫しないものに踊らされている人々に比して、われわれは、真に幸福と言わねばならない。



印度仏跡を訪ねてあれこれ

塩入 亮 達

(大正大学助教授)

仏教徒として仏跡に是非一度お詣りしてみたいと思う人が近頃少からざるあるようですが、仏跡巡拝をしたのは嘗ては明治時代から主として学者か、印度の研究家位なもので、私の師匠なども、大正末に、浅草寺の救護栄海大僧正の随行で加藤観澄師や高階彌仙師らと同行の旅をして、当時、英国オックスフォードの留学を終えられて帰国途中印度仏跡を巡拝された京都大の名誉教授、羽溪了諦博士と邂逅すると云う場面があったことを、先年、同博士を団長として、仏教東漸七十年記念として渡米をした時に、同博士からも旅の途中で伺った。あの頃は、旅客飛行機など思

いもよらなかつた頃だから、今日ジェット機で、僅か十時間余りで彼の地に到着することを考えると隔世の感があるわけで、全体の時間的には、昔の三ヶ月を二三週間で終了することができるとはしないでしょうか。

私は去る一月廿三日から二月十四日に至る二十三日間で、インド六大仏跡を始めアジャンタの石窟寺院、セイロン・タイ国などの寺院に寄りつつ、巡拝と視察と観光をミックスして、一行十五名の団体をつくり、廻って来しました。

仏教徒として、また仏教を学ぶ者として、これは最高の望みであり、"シーイング、イ

ズ、ビリーピング"と言う英語があるが、見ることが信ずることと、百聞は一見にしかず、實際この眼で見、この手で触り、この鼻で嗅ぎ、この足で歩くことによつて、仏陀の踏ましめられた大地に跪き、靈氣の溢れる空気を吸つて、始めて仏の教えを噛みしめることができるような気がしました。日本とは氣候風土が異り、人種も異なるが、そこには共通した東洋的思惟の流れと慈悲の意味合いが表現し難い中にも感ぜられて来るのであります。

私は六大仏跡と申しましたが、それは、

1 ルンビニー (生誕の地)

2 ブッダガヤ (成道の地)

3 サルナート (初転法輪の地)

4 ラジギール (靈鷲山の地)

5 サヘトマヘト (祇園精舎)

6 クシナガラ (涅槃の地)

を指したわけで、巡拝の道順路は4、2、3

6、1、5の順が普通回り易い順だと思われ

ますが、印度の現在の国情は経済、交通など極めて立ち遅れていて、且つ広大な地域ですから仏跡参拝をする為には相当の準備と心構えを必要とするのです。

旅行の時期

インドは大陸性の氣候ですから、十一月から二月頃までの間が日本人には適当

で、四月の終りからは雨期に入るところがあり、五月からは最も旅行にはつらい季節になります。従っておそくとも一月には旅行を始め二月初めに帰るような日程がよいと思います。

緯度からみると、カルカッタが台湾の南端

位に当りますので温度も想像がつくと思います。序でに、旅行運賃ですが、今日のように航空機を利用すると、航空運賃は、大体二十五万円前後(エコノミイ・クラス)でしよう。

航空会社は大会社が協定しているので、サービスの仕方に特色と区別があり、アナウン



(ブツタガヤ大塔)

スは自国語と英語の二種類を使いますから、英語は旅行には必要な言葉で知っていると大変便利なが多いわけです。

特に印度は英語で統一しようと試みられたこともあり、またインドは言語の種類が多いため、統一する必要性も考えられたのでしよ

うが、事実、インド語にない言葉は英語を混ぜてインド人が会話をしています。統一インドの悩みはこうした国語問題にもあるようです。

セイロンでは、セイロン語、つまりシンハリ語を使いますが、現在、英語もインド語もポイコットして、学校でもシンハリ語一本で統一する方針を政府がとっているそうです。が、言葉が不足して随分不便なことがあると現地の人が歎いていた。昨年、清水寺の大西良慶師らの一行が、セイロンのキャンディで、お坊さんと会見した時に、通訳に入ったセイロン大学に留学中の山田英夫氏(愛知芸大講師)が、まず日本語を英語でホテルの人に話し、その人がシンハリ語で坊さんに伝える、つまり、日本語英語シンハリ語の三段式に語り伝えるのでご本人の間に二人の通訳が入り、一体、本人同士の意志が正確に伝えられているかどうか甚だ疑問でしたとキャンディのクイーンズホテルで私に話して呉れた。

日本でも国語審議会で先生方の意見がまとまらないようだが、インドやセイロンでは、

一人前の独立国になるのにはまだまだ問題が多いようである。

さて服装は、軽装主義をとるべきで、下着類は短期間には消耗することもないので、洗濯物は乾期にはすぐ燥くから、沢山用意する必要はありません。外装は、丈夫なもので、却って高級なものでない方がよい、と申しますのは、洗練された都会と違って、何となく環境が汚くて油ぼく、住民も皮膚が黒いだけでなく、不潔なもので、乞食が多い。彼等は外国の観光客とすると執拗について来て金をねだる。うっかり道でも尋ねたり、多少に拘らずサービスを受けたりと、途端にチップを請求される。そんなことから惜し気のない衣類をつけていた方が気が楽だろうと思います。

こんなことは、今後インドへ行かれる方がある場合の参考の爲にと思ったものですから書いたのですが、一寸気がつき難いことを二三挙げますと、

○水筒（われなないもの）を必ず携行のこと。

○ガーゼマスクは塵埃と伝染病予防に数枚携行。

○軽い安価なサンダルを一足持参、帰りには棄てても惜しくないようなもの。

○小型懐中電燈一個。

○ポリエチレンの袋を持って行く（たたむと小さくなる）物入れ、整理に便利。

○カメラはどれか一種類に決めて幾種類も欲張らない方がよい。

○米の上等なものを三合か五合位持参。

これは、インドはフット、クライシス、食糧危機に見われているし、また不味いし、嗅みか鼻につくので、食欲不振に陥り易い。そこで、二三日おきに、にぎり飯でもこしらえてごらんさい。とても美味しく感ずることでしょう。それ毎日、とてつもないカレー料理と、香料の爲に、樹木の葉（名前は忘れたが）を混ぜるので、食べ難いことおびただしい。

パトナから王舎城へ

カルカッタ二泊の後、追いつてられるようにして、インド国内航空のフレンドシップは吾々を約一時間二十分の空の旅に誘った。カルカッタ空港で「ステーツマン」新聞の朝刊を買った時に、サー・ウインストン、チャーチ

ルの死を一面のトップ記事で報道していた。

一月廿四日、午後一時三十分（インド時間）

とあったのが、飛行機内の乗客の話題になるかと思つたが、案外平静なので気抜けした感じでした。

機上から見ると右手にはヒマラヤの連峯が雪を戴き、手前には、ガンジスの流れがうねうねと白く光って見える。中印度は広漠たる平野がどこまでも続いている。

パトナはマガダ国時代の首都で、民間空港は修理中なので、ビータ軍用飛行場に着いた。ここは撮影禁止地帯になっていたが、カ市と比べると空気は冷えびえよ感じた。約五十分でパトナ市街に入ったが、興味深い博物館や街の中など見る暇もなく、これから約二時間かかってナールランダに向うが、余り広くもない道路は一応補装され、両側は大きなマンゴー樹の並木がどこまでも続いている。バスは全部政府の経営で、アシヨカ柱の獅子の頭と逆蓮弁の模様が横腹にマークされているが、大したボロ車である。とうとう、ラカンプールという所で午前十一時半頃、ブレーキの故障でストップ。代車を呼びに連絡したり

で数時間を費さなければならず、ナーランダ大学跡は、ブッダガヤに行った帰りに寄ることに予定を変更して一路ラジギールへと突走った。日暮にやっと王舎城の町に着いた時はほっとした気持で、直ちに、日本山妙法寺にお参りをすませると、政府経営のレストハウスに入った。王舎城は大体盆地になっていて、周囲は五つの山が囲んでいる。妙法寺の八木天撰上人は、バイバラ・ギリ、ピブラ・アチャラタナ・ギリ、ウダヤ・ギリ、ソウナ・ギリ、と云っていた。

妙法寺のすぐうしろにピブラ山が岩膚をみせ、見えないが、その後ろが靈鷲山だそうで、レストハウスの正面の山には夜になると麓から峯に続く道に電燈がついて、周囲は森閑として信州の山の中にいるような感じである。

その昔、釈尊が浴したかも知れぬ温泉がいくつもあったそうだが、現在はその一つが立派な建物の中に設計されて約四十二度の温泉がわいている。

日暮れになるとめっきり冷え込むここでは寒さに割合弱い印度人達は温泉場から引揚げ

てしまうと云うので、夜九時半、バスタオルや懷中電燈をもって入口までバスで出かけた。

たしかに肌弱い。日中の暑との温度差が相当ある。

湯治客で賑う温泉場には意外に多勢の人達がいた。ガイドのダスグプタが現地の人達を追いかうように交渉している様子なので、私はそれをとめさして、彼等と一緒によいなら吾々は構わぬと言って、脱衣をすると石畳の上に降りて行った。

何箇所もの蛇口からは湯が出て、現地人達が浴びている。ところが浴槽は更に階段を降りて下に八畳位の広さのものがあり、綺麗な湯が一杯に溢れて七八名の者が入っていた。胸の辺りまでの深さがあり底は大理石の細片が敷きつめられ、拾ってみると大変美しい石であつた。それまでの旅の疲れを癒す心地よいリラックスな気持から、頭に手拭をのせ、くわえ煙草でつかっていた人が、ここは聖地の清らかな温泉なので、煙草は止めて欲しいと現地の人から私に話し掛けられたので、早速やめて貰った。インド人は信仰に対して

は、極めてまじめな国民だと思った。

恐らく法律は破っても宗教上の慣習に対しては極めて忠実な人達なのであろう。それは旅行を通じて一貫して感じたことである。

靈鷲山へ

前の晩に、王舎城の学校の校長さんをしたと云う人に、日の出る時間をきいておいた。一月廿六日、それはインドが共和国となった記念すべき日であることを聞かされたが、早朝五時半に起床した。気の毒であつたが、十八才の老人を揺り動かして起した。電燈は電源が切ってあり点かない。懷中電燈を手さぐりで探し、急いで仕度すると、バスで靈鷲山に向かった。空は既に明みを帯びて日の出の間近いことを告げていた。約十分程行き下車。そこから簡易補装した二メートル位の巾の山路を登ること二十分。それは靈山の第三峯で、釈尊が法華經説法の会座として余りにも有名で、もちろん、考古省の管理の下、手をつけることは許されない。

頂上は、双物で横に切ったように台地になっていて、三十畳敷の広さの中央に、釈尊が

坐されたと云われる赤煉瓦で囲まれた場所があり、日の出と共に静かな、然し力強い吾々の観音經の読經の聲が、四辺に響き亘った。ヒンドゥー教のダスグプタも吾々と一緒に手を合せていた。彼は、今までに何回かここに仏跡参拝団を案内したが、夜明けに登って、皆さんと一緒に日の出を拝んだのは初めてだと片目の顔を、やがて登って来た美しい朝日に輝かせながら共に感激の面持で語った。私の如法衣が朝風にふるえている。

道路を隔てて西側には多宝山と名づけられた山があり、日本山妙法寺で三月六日に舍利塔建立の定礎式が行なわれると言うことであつた。

この辺りは全くと言ってよい程人工が加えられていないだけに、余計有難い感じがしたのであつた。

道をもとへ下ると直ぐ下には舍利弗、目連阿難陀等尊者の洞窟がある。地質は岩磐で、従って岩洞が雨露、或は太陽の陽射しのよいしのぎ場所である。

吾々は、王舎城近辺の七葉窟とか、竹林精舍跡などを訪ねる時間がなかったが、街中は

最近次第に賑かになつていて、十字路の一角には簡単な柵を施してその中は、阿闍世王が建立の十塔の一つの趾や、阿難尊者の塔の趾が、手を触れることを禁ぜられたままある。恐らく日本だったら文化財保護委員会が、懸命に手を打つところであろう。

吾々はビハール州の会議派議長と共に、この村から正式に招待をうけて午前十時に中央の広場に招かれ、印度共和国々旗掲揚に敬意を表し、お茶の響応に与つたことは幸いで、計らずも日印親善の為に役立った。

ガヤへと向う

午後四時廿五分、吾々は王舎城の南門を通過しながら、王舎城悲劇の歴史的な史跡を後に、ブッダガヤへと時速八十軒でバスは突走つた。

仏陀六年の苦行林は何処なのか、前正覺山から降ってナイランジャナ河に沐浴されたのは何処の場所かは未だに定かでないが、河は乾期で干上り、美しい砂をビニールにつめた。

伽耶の大塔は夜の闇の中に見えたのは、夜

も八時過ぎで、お詣りだけして拝観は明朝にした。

現地の案内人の先導で、ブッダガヤ寺院のソマナンダ比丘とダンマクベカ比丘にお目にかかり、一応説明をきく。

紀元前五八八年に釈尊はこの地に来り、仏滅後二五〇年、阿育王はここに小さな寺を建てた。この塔はその草庵の一部が拡大され、千七百年前に建てられたと云っていた。十二世紀、回教徒の攻撃が一度埋められ、天沼俊一氏の「印度旅行記」を見ると再び発掘された塔は非常に破損された様子を写真で見たが、今日は仏教徒と政府の力で補修されて立派なものであつた。

ガイドが内部の釈迦仏像について、私と議論し度いとしつこくつめよって来た。

つまり、衣のつけ方が肩を出していない仏

像は大乘仏教の仏像で、肩を出している方は、小乗仏教だと云う意味なのだ。この意見は違見だと思うが、大学の先生だと云う君の意見はどうだと云って終始私の傍を離れない。そして、最後に、君の持っているカメラは上等だが一体いくらだ。万年筆を売らない

かと、本音をはき出したのには驚いた。

金剛座上でお悟りを開かれたと言う場所は一七呎の大塔の裏側に塔に接して保存され一本の大きな菩提樹が繁っていた。上記のセイロン像が管理していて、吾々を実に気持よく又愛想よく案内して呉れた。仏跡復興の力は、どこへ行ってもセイロン僧の機ゆまぬ努力の力であることが分った。日本では唯、日本山妙法寺の人達が、この異国の荒地に黄色い衣をつけてビパール州の中のような聖地を文明にとり残された人達を相手にして歩き続け、応仏の聖域を供養している姿は尊いと思つたし、また日本仏教徒は余りにも今まで無関心とは云わないまでも、仏跡保存に対して消極的であつたような気がしてならない。

最近薬師寺管長の橋本凝胤師が中心となつて、ブツダ伽耶に土地を買い、センターを建てる話が進められているが、貴い浄業だと思ふ。

そして今のインド共和国の現状では、日本仏教徒の積極的な協力が是非必要であらうし、狭くなった感のある世界交通の発展からして、距離的には仏跡巡拝が、今後多くの人

たちによって行なわれるであろうからインドの氣候風土の悪条件に対してもさして苦にならないような施設が出来ることが望ましいと、改めて考えさせられた。

吾々の一行は、これから、バーラナシーにあるサルナートの初転法輪寺、通称日本寺と云い現地ではムルガンダ・クッチイ・ビハラと云っている著名な寺院があり、ここに



ルンビニー園にて
柱はアシヨカ王建立のもの

は、ジョンマーシャル卿が一九三一年に発見された仏舍利と申すか仏骨がお祀りしてあり、頭に頂いた。

またクシナガラに仏陀荼毘の地、ルンビニー（ネパール領）の誕生の地等の必ず参詣する聖地があるが、今回は紙数の都合もあり、想い出を書き綴った次第である。

一言揭示板

いまの世の中で、とくに欠けているものは香りであろう。人間にも、言葉にも、食物にも香りがなくなった。現代人は精神的な嗅覚を失っている。

多忙とすぎゆく世事のひととき、香を焚いて、しずもりの中に心をきよめる、といった清閑を忘れていようである。永生とは、ただ香りとなつてのこるこである。

○

陶醉の境にはいつて自分を忘れようとする人がある。そうしなくてはつらいからと言う。しかし、人はどんなにつらくても自分をはっきりとしておきたいものである。

「たとい身はもろもろの苦毒の中に止まるも、我行精進して忍んで終いに悔いず」

という法蔵菩薩のことばは、陶醉者の味うことのできない言葉であらう。

生き甲斐ある人生

——念仏は現代人に

必要な生活態度である——

あるバタ屋さんが、生活記録のなかでキリストの門をたたき、仏の袖にすがった。だがどんな名言も腹の足しにならず、どんな美句も寒さを妨いでくれなかった。と述べ自暴自棄の生活のなかに身をくずしていくすがたを記している。

しかし、そのどん底の境涯のなかで、同じバタ屋の老人の「だけども、自棄になりや自分が傷くだけだし、死んじやつたらおしまいだ。お天道さまは、いつまでも片方ばかりや照らしちゃいねえ、あてもなく、ふうふしていると、ろくなことはないよ。なあ」という温い言葉にふれて、それが機縁であたらしい生活の芽をみいだしていったということである。

私たちが人生においてあるときには、味気なさを感じ、また苦難を味うことの多い世の中でふとした情や愛にふれて、はじめて人生の感激や生き甲斐を感じ、そこに新しい生活が

くりひろげられていく。自らうけ感じとった愛となさけの心情の発露が、他の人びとへの奉仕となり、和らぎの生活が展開する。このような謙虚な、しかし、充実した生き方を、私たちはどこに求めたらよいであろうか。

私たちは、なにを本当の生活と実感するか、なにに生き甲斐を感じるか、ということが常に問題となってくる。人生すべて物質的にゆたかで、楽にさえくらせれば万事オーケーというものではなさそうである。私たちは、どういう形ちの暮らしをするかと、ほかに、どういう気持ちで生きていくかというところが、同じくらいに、あるいはそれ以上に大切になってくる。

ところが、現代人は「気持」などと呑気なことをいってられる時代ではない、というかもしれない。

しかし、最近とみに憂慮されているベトナムの問題一つを考えてみても、勿論一概には云えないにしても、アメリカの東南アジアに対する政治力や経済力のための政策をもちこみ押しつけても、反感を買うのみであって、むしろその国の民族感情が納得するような政策が期待されるのは事実であろう。その民族感情とは、いわばその地域に住む人びとの気持を考えてキメのこまかい政策をおこなうことであって、このようにみても「気持」の問題は余計なことどころか、世界的な課

題といってもよい。愛情のある政治といわれる意味もここに縁因する。

しかし、いちばん肝心なことは、他人がどうするという前に、この自分自身が納得のできる生き方はなんであるか、人はどうであれ自分はこう生きるということを、はっきりつかむことである。

実は、この問題と真剣にとりくまれたのが法然上人であり、この私という人間の生きる問題としてひらかれたのが、選択本願の念仏である。法然上人のあおがれた仏の心とは、即ち大慈悲であったから、人類のために戦争を憂え、社会の下積みの人びとの運命を悲しむことは当然、仏心の内容であろう。大切なことは、本当にそれが魂の中から自分の問題になっているか、どうかである。

お念仏というのは、必ずしもじっとして念仏しているのでなく、あらゆる生活や活動と表裏しているものなのだから、貧乏からぬけ出る活動に、またこれをなくする努力に念仏がなされてよいし、なされなければならないのである。自分の実力の範囲で、自分の本当の気持でいくらか人のためにもなればと願うのが、念仏の生き方だといったら誤りであろうか。

現代人は科学的であり客観性を重んずるといわれる。ヴィ

クトル・ユーゴーの言葉に「今日の問題はなにか。斗うことである。すべての日の問題はなにか。死ぬことである」といっているが、この間違いのない客観的事実にもかかわらず、私たちは、何となく明日も明後日も生きていのように思っているし、死を云々するなど閑仕事ぐらいに考えている。

してみると、私たちは、科学的な生き方も根本的なところで客観的事実に眼をおおっているといわねばならない。その結果、自分自身の言葉と行いとがどんなに喰ちがうか、よいことは自分の手がらとし、悪いことは他の責仕にしたがるものか、すべての行いや生活がどんなに自己中心的なものであるかを痛感させられる。

私たちは、すばらしい自己犠牲というようなことは、とてもむずかしいが、つつましく、ゆずりあって生きることができし、少しでも人びとのために尽すこともできるものである。

さらに、このような謙虚さから、人生における深い知恵や高い愛も次第に体験されて心のせまい扉が開かれるようになれば、それがちいさな自己が、おおきなみ光とみ命につつまれた生活、即ち、「なむあみだぶつ」の生活である。

いいかえると、念仏生活を相続することは、我利々々に生きる自己より解放されて、生かされている自分に気づき、豊かなうるおいある人生を味わうことができるのである。

三大学印度仏跡参拝に同行して

上 坂 元 一 人

(飯野川崎トラベル旅客団体課長)



旧臘廿二日、駒沢、立正、大正の三大学関係者からなる印度仏跡参拝研究団の一行十六名が羽田を出発した。私はその旅行のお世話役として参加の榮を得た。この旅行記はその印象を全く俗徒の立場から綴ったものである。

羽田空港を十一時三〇分に離陸したインド航空のボーイング七〇七型ジェット旅客機は途中、香港、バンコックに寄港して一路カルカッタへの快適な飛行を続けた。

大部分が始めての海外旅行と聞いていたが機が富士山を右後方にし、桜島を過ぎる興奮の一時が経つと雲海のスナップや絵葉書の便りを書くのに余念がない。台湾上空から香港にかかる頃には機内もすっかり落ち着いていた。香港ではバンコックへ行く金髪の美人観光客

十数名が乗り込んで来たが吾々一行も先客として悠々たるものである。バンコックで夕映えの空へ飛び立った機はやがて暗い夜を迎えた。思えば東京ではクリスマスセールも酣、一杯気嫌の忘年会族が家路に千鳥足の時間。今朝東京を発って十時間余、今降り立つ大地は日本を遙かに千六百三十三哩の西方、印度はカルカッタ、ダムダム空港である。

一步機を出た途端に紛れもなく印度に着いたのだと云う実感が旅の情趣をよび起す。

みんな身体に異常なく、忘れもののないのを確かめてからバスで税関待合室へ。私たちをここまで運んでくれた『ダウラギリ号』、お世話になったホステス嬢、サヨナラ！

カルカッタ空港税関はその旅具検査の厳重なことで世男的に有名である。私の仕事ははじまった。大型スーツケース十九個、携帯バッグ各人一個、これを全部、例のスローテンポの印度調で検査されたのではかなわない。

こんな場合、先達の助言は実に効果的である。出発前到着予定を通知しておいた大菩提会から副総裁ソフト博士、バリシナ事務局長らの出迎えて税関吏の心証もよく、ラスクに

姿勢を正した団長さん以下を前にしての聖職

者にして仏跡参拝が目的であり、貴国の禁制する物品の持込みは全然ない事、高齢者多く長時間の飛行に疲労しているから迅速な通関を請う旨を申し述べると幸に聞き容れられ私の荷物の自主的提示のみで通関は完全に終わった。生花のレイを首に車を連らねて夜の幕に包まれた町を走り抜けてホテルに向った。沿道に群れ屯する無数の人々が住む家とてない下賤の人々であろうとはつゆ思い及ばぬことであつた。

千九百七万人（一九六一年調）。

人種はインド、アーリア族、トルコイラニア族等大宗七種族に分類されているが判然としたものではない。

言語に於いても現在公用語は英語で、憲法で公認されている言語がヒンディー語（国民の四十四％使用）等十四種の多きを数える。

教育面で文盲率は八十％になんなんとし、独立後の教育普及には大きな努力が払われてはいるが各州によって現実には大きな差がある。

宗教文化面では総人口の八十五％がヒンドウ教で十％が回教その他キリスト教、シーク教ジャイナ教、仏教などがあげられる。

一夜明けて廿三日、私達は終日カルカッタに滞在した。先ずここでこの旅行の背景となる印度の梗概を申ししよう。印度は一九四七年八月、約二世紀半の永い英国の植民地支配から独立しました。民主共和国で国家元首にサルベバリ、ラダクリシュナ大統領を戴きラール・バハードウル・シャストリ首相（今は亡きジャワーハラル・ネールの後継者）の下に内閣があり、国会は上院（議員数二百五十名、任期六年）、下院（議員数五〇〇名、任期五年）の二院制です。国土総面積約三百二十余万平方呎、日本の約九倍、人口四億三

はもとより、通婚、食事を共にすることも禁

じられており、憲法での国民の平等と工業化の一面で徐々にカースト制が失なわれつつあるとはいえ厳として存続しインド近代化の前途に暗らい大きな障碍となっている事実はまごうべくもないところであろう。

最後に日本と印度との関係に就いては両国は極わめて友好的関係にある。彼我国賓級の訪問だけ数えても岸、池田両首相の訪印、故ネール首相、ブラサド大統領の訪日更には皇太子ご夫妻の訪印がある。

さて、カルカッタは英国東印度会社をはじめて設立されたところで街の歴史も古く、目抜通チョーリング通は建物も走る二階バスも英国そのもので、わずかに道行く人達に印度を感じる程です。

ヴィクトリア記念館には往時の大英帝国王朝の繁栄を今に伝える何千もの陣列品が所蔵されている。記念館前広場には数多くの幕営が仮設され、一月二十六日リパブリックデー（印度最大の祭り）に備える兵士のパレードの練習が行なわれていた。青い空の色それを直線で切る低いドッシリとした練瓦のピ

ル。のどが渴いたのでコカコーラを飲む。空気の乾燥がひどく唇がカラカラになる。広場の隅樹蔭に寄ると、どこから、いつの間に來たのか、猿廻し、へび使いの類が幾人となぐ集っている。私はコブラを躍らせる笛吹きを所望した。ターバンを巻きたくましい口ヒゲをつけたその笛吹きは先ず地面に布袋を置き、それに向かつてしやがみ込むとゆっくりと静かな調子の曲を吹きはじめた。さりげなく地面に投げ出された布袋がゆらゆらと動きはじめたと思うと、コブラの平べったくて三角な頭がすつと顫れた。笛の樂の高鳴りにつれて首を高く揚げる仕草。

笛の節が変わるとへびは違った動きをする。魔術的な不思議に見とれているうちに楽曲は終りに近づいた。再びへびは袋の中に戻りへびのショーは終った。太陽の降り注ぐ白昼、全く一巻の夢物語である。何だか大変疲れた。

ここの博物館はインド最大と云われるだけあって仏像のコレクションも多い。私の最も興味を感じたのは、エジプトから持ってきたものと云われる女性のミイラ、直徑四〇釐、

長さ十五―六米の原木の形を忠実に止めた化石、それに武器のコレクションだった。

ミイラには四千年の歴史を、化石にはこの国のもつ途方もない未知の世界のポリニウムを感じ、弓矢からモリの類の武器にはその数の多さに斗争の悲劇の日々を想い、深い感慨をおぼえた。

夕刻私たちは大菩提会を訪ねた。昨夜空港に出迎えて下さったソフト博士、バリシナ事務局長のお二人とシナラタナ師に、バンキム・チャタルジー通本部の玄関で迎えられた。

本部応接間には皇太子訪印の際大菩提会に贈られた友好と感謝のメッセージが額入りで飾られてあった。この人々の昨日に引続く好意と相俟って、旅の前途に感じている不安が少しずつ消えて行くような気がした。集會堂でソフト博士の友情と愛に満ちた歓迎の挨拶に答えて一行の団長、山口智光師からダルマバーラ上人生誕百年祭の行なわれるこの機会に、等しく仏縁に生きる我々が釈尊生誕の印度を訪問出來たよろこびと、共に仏縁に連なる日印両国の繁榮を願う旨の立派な答辭があり、茶菓の接待を受け乍ら、各団員の紹

介、ダルマバーラ上人の偉徳を偲ぶ話題は仲々つきなかつた。

最後に本堂で読経してこの善意の人々と別れた。本堂には日本、セイロン、ビルマ、タイの代表的な仏像が安置されており、ネパールの藥製の仏像は素朴な信仰心を物語ってむしろ優雅な趣きがあった。別れ際、ソフト博士は次に訪問していただく折にはこの横に宿泊の施設を完成します。もうホテルに泊って不自由な思いをなさらなくて大丈夫ですと云われて、心の通い合う倅を泌々とうれしく思つた。

タルカッタで二泊ののち廿四日早朝、颯たちこめる空港からバトナへの機中の人となった。バトナまで一時間三〇分の機中で朝食のサービスを受けた。ミス・ダクウォズとミス・チャブラの二人のホステスは仲々に人氣があった。大柄なダクウォズ嬢と小柄で眼の大きいチャブラ嬢、共に仲々の美人でカメラのポーズにも、実に愛想良く答えてくれました。旅行の楽しさは異国の地で率直な氣持で物事にぶつかってみることです。氣持次第です。

パトナ空港に着くと中型乗用車五台が待機している。車はアンバサダー（モータースの合弁会社）と云う印度の国産車でほとんどこの一車種を使った。一行十七名と現地ガイドの荷物を積んでパトナの街へ向う。街のホテルリパブリックで寝具を借り車に積んでブッダガヤへ出発した。街を出ると一面の平原は行く手に一本の道だけ。両側を素足で歩く人、牛車の群、車は行き交う度にスピードを落す。途中で一台の車が遅れた為、とある村で一同車を止めると、おびただしい人垣が車の廻りに出来た。欧米ではカメラを向けると大抵顔を背けるがこの人は我も我もと集って来る黒い顔に白い歯を出してニユツと不気味な笑顔さえ作る。道端に散乱するおびただしい汚物、太陽の熱で乾燥する臭気、車がそろったところで早々にスタート。車は山麓にかかる。霊鷲山に近いラジギールの村である。行程の都合で今日は通過して、ブッダガヤに直行する。

ンキーバナナである。ラジギールを過ぎて暫らく右に左に奇岩の小山が平野の中にいくつも見える。そうするうちにガヤの町に着いた。車は人のあふれた通をクラクションを鳴らしつ放して人を押し分けるようにして進む。尼連禪河の橋を渡るともうブッダガヤの地である。河床に乾されている色鮮かな洗濯物はその厩大な量に驚ろく。大精舎の姿が遠望されはじめた。道は暫らく迂回して大精舎に近いレストハウスに着いた時は黄昏に間もない頃であった。疲れた筈の顔は感激に輝やき万燈供養の大精舎へと出掛けて行つた。

大精舎については語る必要はないと思う。圍繞する各国の仏教寺院は新らしい仏道の光を見るようで、さながら大精舎を釈尊にみたてればその教を乞う人々の集りの感すらある。けれども、大精舎の周囲にはおびただしいチベット難民が居住しており、これが大精舎の周辺を汚している。或るいはこれが仏道由来の真実の姿なのであろうか。（大精舎の近くに貸馬車（三人乗り）があり早朝散歩に使うと面白い）。

と伝えられる、尼連禪河の河畔に立った。河の彼岸遙るかにその昔の苦行林、前正覺山の山容を見、椰子とマンゴの樹蔭に村娘スジャタの供養心を冥想、暫時を過した。二時間のドライブの後私達は霊鷲山麓に着いた。青い空、緑の樹海、厳しい霊鷲山の山容、ふと私は、限りなく展がる青空に永遠の生命——浄土——を、厳しい山頂に釈尊の御姿を、そして圍繞する緑豊かな樹海——茫漠たる褐色の平原の中でこの一角だけは実に美しい天然の調和をなしているように思うのだが——に仏縁に帰依する衆の生姿を思い見たのです。

ここには法華経、観無量寿経、を生んだ歴史が眠り続けているのです。王舎城趾、竹林精舎趾、ピンビサラ王幽閉の悲劇、等々、今私の手元にある小さな石塊は霊鷲山頂から持ち帰ったものです。これらの歴史を見つめていたこの石塊を見つめることでいいしれぬ無量の感慨に襲われます。

一行の道中にいささかの悪事とてなく、此の地に巡拝をなし得た御仏の御加護を感謝しサルナート、ルンビニ、クシナガラへの遠い道程の無事を只管、祈念しました。

心 ぬ け つ 疵

宝 田 正 道

(中央公論社 自然編集長)

竹影揩を掃って塵動かず、月潭底を穿って
水に痕なし
八 禅林句集 V

五月は新緑の若葉が眼に美しく、風もさわやかで、心も軽い。青い空高く鯉のほりがビルの屋上で翳っているのは、都会の端午節句風景として面白く、また昔ながらの懐しい習俗の名残りとしても詩情ゆたかである。

今月とりあげたこの詩偈の極意は多少難しいようだから、簡単に註解をしておくが、もと『禅林句集』という書物は、全二巻から成り、貞享五年(元禄元年)に刊行された。臨済宗系統の禅僧英朝という人が、禅に関する古来の有名な詩偈を編み蒐めた本で、英朝は永正元年(一五〇四年)寂となっているから、大体、足利時代、応仁の乱前後に生きた僧侶の一人である。浄土宗でいえば、宗祖滅後二、三百年経った頃で『実隆公記』や『御湯殿上日記』『親長卿記』等、当時の公家の記録類によると、知恩院や知恩寺(百万遍)、清浄華院等がさかんに宮中公卿と接触親交し、宗祖三百回遠忌奉修の計画準備を進めていた時代である。浄土真宗では蓮如が、天台

宗では真盛が、それぞれ寺門興隆や教派独立のために活動している。そして宮中では諸経講讃会のほか浄土雙六や念仏草紙、浄土法文連歌などの遊びも行われて、外観的に仏教色は濃厚であった。ただ、義政が銀閣寺を営み、一休宗純、一条兼良らの出世の一方、各地に一向一揆、土一揆が蜂起し、まさに各宗とも、乱後人心の収緩と布教の工夫に混沌たる行態を呈していた。

こういう時代に編まれた『禅林句集』が、やはり世の動きに対処すべき警世的人生訓を多く含ませようと意図したことは、想像にかたくない。まして応仁の大乱を体験した僧たちの悲願としては、そうあるべきが当然であったろう。

語句の一つ一つは、大してむずかしいものではない。どこかの山奥に、焼け残った禅寺の境内でもあると思っていただこう。その一角に竹林があり、崖下に滝があるとすると。風が吹いて孟宗の竹やぶがザワザワ鳴り、その黒い影が幣で掃くように樹下のきざしを往き来するが、一向に地上の塵は、それにつれて動き移るということはない。影だけがゆれ

るけれども、塵には何の影響も与えないのである。また、夜になって淵の上に月が出る。月の影はその滝壺に美しい影を落すが、雲にかくれて光を失うと、とたんに滝壺の中には何の痕跡も残らないで、水面は依然の水しぶきだけが躍る滝壺の暗い淵に戻るにすぎない。月がさすからといって水は何の傷痕も受けないのである。

おおよそ、そういった字句の意味である。何でもないことのようなのであるが、よく味わってみればみるほど、含蓄の深い言葉であると私は思う。詩的描写もなかなか凡手でない。

実はこの言葉は、もう四、五年前に、『婦人公論』という教養雑誌の編集に携っていた時、私が鈴木大拙老師からいただいた詩偈である。当時、新年号の付録に「一週一言」という小冊子をつくり、「わが人生の忘れ得ぬ言葉」という副題で、有名な諸先生方五十余名に一人一句ずつ自選自獎して蒐めさせてもらった。その時、鈴木老師を担当したのが、私である。

私は、一日、北鎌倉の松ヶ岡文庫に老師を訪ね、口述筆記の形で、この一句と感想文を

いただいたのである。老師はこの詩偈の感懷を述べて、「この詩偈は唐の祖燈禪師志磬の上堂の語中にある」とご教示下され、「一言でいいかえれば真空妙有という意味になるのだが、今の若い者には、真空妙有などという熟語は解らんだらうから、勉強してよくその意味を味読することじゃ」ともおっしゃった。そして、とかく昨今は速成時代で、悟りまでスビーディにやろうと考えるが、たかが十年二十年修行したってダメで、「わしもこの年になって初めてどうやらこの句に心惹かれるようになった」と結ばれた。さすがに、世界的な仏教学匠で、禪に徹した白寿の老師ならねば吐けぬ感銘深い警策的述懐である。

私も、下手な註釈をつけて「真空妙有」の説明や引例を挙げる愚をやめようと思う。ただ、日常生活の上で、時々、無意識のうちに人に対する自分の軽率な言動が、相手を傷つけていわないだらうか、と反省する心を持つようになったのは、実にこの詩偈と老師の感懷をいただいたお蔭であることを、一言つけ加えるにとどめよう。

大はベトナムの気狂い戦争から、小は各個

人の些細な夫婦喧嘩に至るまで、われわれはとかく竹影になって塵を動かし、潭底の月になって水を傷つけるような悔いを残しがちではあるまいか。言葉のはし、行いのはて、すべてにわれわれは、もっともっと細かく気を配って、「花びらや色香を損わず、蜜のみを摂りて去る蜂」(法句経)のように振舞う必要があるのではないか。

常に相手の立場になって考え、行動する反省が、身边に余りにも少い昨今の世情人心を、せめてこの詩偈からの深い示唆で改めてゆきたいものである。

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し
何代も研究せる卓越せる技術は他所の出来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇る赫々たる定評ある当方へ。建設者請負業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

東京都文京区春日一丁目九の二八
銅瓦葺協会 石 黒 工 業
相談役顧問
設計及監督 電(八一二)一五五一

小林円達僧正

高橋良和

(中外日報取締役)

小林円達僧正
は知恩院の執事
長であつたがそ
れまでは宗会議
員や浄土宗務所
の財務部長など
をつとめた人で
ある。

京都のどまん
なかの寺町四条
下ル浄教寺の住
職であつたがこ
の寺は兼実公の
灯籠堂の跡であ
るから由緒も深
い名刹である。

小林僧正の若
い頃には京都に
なかなか傑物が
いたので、その
なかに真宗仏光

寺派の元老奥博愛氏や、京都の大仏方広寺から大阪四天王
寺の貫主になった木下寂然氏などが京都の仏教界の指導者
格で、吾が宗からはこの小林僧正あたりが各宗との交流が
あつたようである。

若い頃から宗政界に入つて宗会議員に当選し、その後浄
土宗務所の財務部長に就任したのであるが、当時の浄土宗
は貧弱であつて借金がかなりあつたように思うのである。
もちろん今の金とは比らべものにならないので当時浄土宗
の予算は三十万円ぐらゐであつたからそれで十七、八万円
も借金があると相当なものである。そこでこのエンタツ僧
正の出馬となるわけで、この僧正は財政に明るく一期在任
中にその負債を返還した腕前は見事という外はない。当時
の執綱は渡辺海旭先生であつて、京都から東京に出かけ
て、宗務の部長に就任するなどということは大変なことで
あつたし、また非常な名譽のことでもあつたようで、この
エンタツ僧正のうれしさを思うにつけても当時の部長さま
の偉らさがわかるようである。

このエンタツ僧正は野球がすき、凡そのお顔から察して、
一寸野球には縁遠いように思うのであるが、なんのどうし
て早慶戦などはこの僧正の一ばんすきなゲームであつたら
しく、宗務所を退つてからも用件で東上する度に神宮球場

に出かけて観戦したらしく、東京から京都にかえってこられたときには、黒く焦げた顔であったことも有名であった。

もちろん当時プロ野球などなかった時代で、純真な学生野球にこの僧正は情熱を燃やしたのである。

渡辺海旭先生は浄土宗の宗政上の対立を一本にまとめあげて、一宗から政治上の対立を払拭した人であるが小林僧正もその下にあつて清和会という会の幹部であり、特に京都に住職地があるところから、関西の探題でもあったといえるので、関東の要人、九州の大物たちが入洛したときは浄教寺へ訪問がなされたのである。

このエンタツ僧正のところに御気嫌奉仕が当時のエチケツトであつて、如何にこのエンタツ僧正の識見というのか、手腕というのかが一宗に必要であつたか、想像されるのである。

そういったことからして、このエンタツ僧正は呑むほどに酔うほどに、よく御気嫌であつて酒を愛するということには人後に落ちなかつた人である。

またその呑みぶりといえは、さもおいしそうに盃を重ねるのであるから、横でみているわたしまでこの僧正のうれしそうな態度に心をひかれるのである。

晩年この酒が祟つたのか、それとも、血圧が高かつたからか、高血圧にかかれて、多少口の廻りが重くなつたのである。もちろん亡くなるまでこの口の廻りはスムーズにならなかつたのであるので、僧正の酒の方も多少衰えたようであるが最後まで酒を愛した僧正である。

多少背を丸くして、足早に歩くこの僧正の姿は印象的である。

宗務所をやめて、知恩院の執事長になつたけれど、丁度戦争のさなかいりいろな戦時中の行事のなかに、絶えず祖廟の安泰を気づかつていた僧正のことが目に浮かぶのである。

「わしは口の方が廻らんのでよろしくたのみますわ」

これが晩年のこの僧正のキャッチフレーズのようにあつたが、高血圧で口がうまく廻らなかつたことを気にやんでおられたらしいが、それで磊落な僧正は結構大きな声で喋つておられたのである。

得な人である。敵もなかつた、反対もなかつた、ということもこの僧正の性格のしからしむところである。

若い頃から頭がはげているのもこの僧正の特長であるが、ときどき頭を撫でられるのも愛嬌があつて人なつこい感じであつた。

生來の檀家

渋谷 賢 応

(諏訪仏教会副会長)

近頃の仏教の諸雑誌や論説などに、さかんに宗教の必要性和同時にその個人性を強調する方々が多いように見うけられる。

その論法を要約すると

「寺檀の関係などと云うものは、徳川宗教政策の名残りであって、真の人間の宗教ではない。人間の宗教は個人の宗教であり、個人の宗教である所に真の自由性がある。信教の自由とは、いかなる人が、いかなる宗教をも信ずることができうることを言うのであって自分の家は代々〇〇寺の檀家であるなどと言うことは宗教の封建性の残存である。仏教は寺院には存在しない。もはや僧職もなくなった。これからの仏教は居士仏教であり、在家仏教であらねばならぬ。」

と言うのである。お説一々もつともであり、あえて間然すべきではない。

なる程、徳川幕府により寺檀の関係が決定づけられたのは

三百余年も前の話である。信教の自由という本来の基本的人権は、人間が人間の歴史において勝ち得た崇高なる理想である。近代の複雑なる社会にあって、古くより保たれて来た寺檀の関係を維持すると言うことは不自然かもしれぬ。

しかしながら、若し寺院の寺檀関係が、過去の遺物であるとするならば、どうして維新後の百歳を、日本の大転変期にはただ政策としてうち立てられた組織の隋性とのみ断ぜられない、いくつかの要因があらねばならぬのである。

その最も大なるものは、自己が〇〇宗の〇〇寺の檀家の家に生れてきたと言う生來の因縁である。言うまでもなく人は、生れ出るそのとき、自由意志によって生れる家の、生んで下さる親さまの、撰択をなし得るものではない。いかなる自在の世、自由の社会にあって、このことのみは不可能なことと言わなければならない。人間と生まれることそのことさえ、実は不思議な因縁であるのだ。このことは、いかにも仏教的な因縁話めいていて、近代の人々、在家にも仏家にもあまり好意的に迎えられない説かも知れない。しかしながら、このことの自覚は、少くとも日本の仏教を考える場合に

おいての決定的な要因である。それは自分の両親に繋がり、祖先に遡る。人が生れて自分の生国を変え、両親を変え得ないように、自分が〇〇宗の〇〇寺の檀家に生れ得たことは絶対であって動かし難い。日本がどんなにひずんでいても、両親がどんなに貧弱であつても、檀那寺がどんなに小さくとも、それはそれとしてこよなく尊い生得の因縁、不動の境界であるのだ。

このことはまた、一大安心にも通ずるものをもつ。よく檀家の方々からこんなことばを聞くことがある。

「おらあ、いろいろな人から、いろいろな宗教をすすめられるが、一番ありがてえのがご先祖さまだ、ご先祖がなむあみだぶつの宗旨ならそれでいいってやってやるんだ。そんなことだで貧乏するって言うが、もしそれで貧乏するって言うんなら、したっていいと思つとるんだ。」

このすばらしい安心、浄土宗の何たるかも知らず、安心の由来さえも辨えぬこの田夫野人から、このような力強い信念を聞き得るとは、しかもこの人たちが新興宗教では挺子でも動こうともしない檀家の大部分の心情であるとは、全くすばらしい驚き、喜びである。このことが寺を成り立たせ宗教をささえ、日本仏教の命脈を伝えてやまぬ信念なのである。

このことはまま日本人の無宗教性に誤解せられるかたむき

がある。だから日本人はだめなんだ、無批判無反省で、宗教が実生活に生きていないんだ。そんなものは習慣であり隋性でしかないんだと。もとよりそのままでも能事足れりとするのではない。ましてやその善意の上にあぐらをかくようななどは毛頭思わない。ただこの根本の信念さえあれば、あとはただ念仏を申してもらえばいいのである。

宗祖の申されたように

「人の手より物を得んずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざるといづれか勝るべき。源空はすでに得たる心地にて念仏は申すなり。」

この人々の生得の因縁は甚だ強く、もう「得たる心地」にておられるのである。ただ「念仏は申すなり」と言うことさえできればすぐさま上品の往生人であるのだ。

仏教の教理の研究、その学説の歴史性を論ずることは詳細になされて来た。仏教のあらねばならぬ方向もさまざまに論ぜられている。けれども、今の信者の方々がどのような信仰の実態として受け取っていて下さるか、そのことの研明があまりにもなおざりになっているのではないか。

これは生きた仏教を論ずる人々の一大盲点であると思うのである。

浄土こよみ

— 五 月 —

大橋俊雄



(中 將 法 如 の 像)

五月は正月および九月とともに、古くから「三齊月」とか「善月」といわれ、八齊戒をたもち、殺生を止め、非行をつつしみ、善を修する月とされていた。八齊戒とは生きとし生けるものを殺さず、人のものに手をつけない

端午の節句も今では男児の節句として、誰もあやしむことなくつとめられているけれども、当初は邪をはらうために行なわれたものらしい。菖蒲しょうぶを節物として用いるのも、菖蒲は薬草であって、これを口にすれば長生きするとか、一切の悪をはらうことができると言われたためであった。「年中風俗考」に

五月五日の節供は、毒虫をはらはんがため

い。又みだらな行為をせず、うそいつわりの言葉をはかないというような戒いさめをいうのである。人としてあるまじき、うしろ指をさされるような行いを厳につつしむことを要求されたために、「つつしみ月」とも呼ばれた。

也。夏は毒虫いでて、おほく人の家にも入りたるにより、粽ちまきをこしらへ、毒蛇のかたちにして食すれば、かれをころす心にて、夏虫わざはひなきことを表する也。よもぎしようぶを家の戸口にかざりて、虫をいれ

ぬまじなひとする也

というているのも、邪をはらうことを目的としていたらしいことを物語っている。この日、武者人形をかざるようになったのは、菖蒲を尚武にあやかり、武を重んじたことに原因があり、武は男のもつ性格であることから男児の節句となったのである。また鯉のぼりを立てる風習も、鯉は滝をものぼるという出世の魚としての故事からはじめられたもので、武者人形鯉のぼりは共に男子の立身出世を祝おうとする意図からはとばしりてたものであった。

相伴に蚊もさばきけり菖蒲酒 一茶

山は雲町は八重たつ幟のぼりかな 也有

三日は憲法記念日、五日はこどもの日、そして今年には八日が母の日である。この行事は元来キリスト教徒の間からはじまったもので、母の愛をたたえ、母に感謝と愛敬の誠をささげる日であり、母のある者は赤いカーネーションを胸につけて感謝の意をあらわし、母のいない人は白いカーネーションをつけて母の愛情をしのぼうとするのである。日本ではじめて行なわれたのは大正二年であつたら

しいが、昭和六年葡萄の会という団体が日比谷公会堂で母の日大会をもよおしてからは大衆的なものとなり、二十四年以後は最早やキリスト教とは関係なしに、第二日曜を母の日とさだめて、全国的に行なわれるようになった。

母の愛に感謝している人は多い。否、すべての人であるといった方がよいかも知れない。反面、つよくひかれた母の愛が、母の死によって断ちきられたとき、母の菩提をとむらいたいという切なる心がつのって出家した人も少くない。それほど母の愛情は限りなく強いものがある。明治の頃、知恩院阿弥陀堂の再建をはじめ、建築に敏腕をふるい、宗内で「木工の頭」の称さえあった武田芳淳は、母につかえること至孝、身は多忙であったにもかかわらず、母を大森寺に迎えて孝養した。孝養のさまを聞かれた門主山下現有は、いたくその志を賞して慰母庵の額を賜い、五十六才のとき芳淳は九十二才の母を失ったが、時に悲歎のあまり、

声あげて呼べどいらへもなかりけり

峰の松風 谷の山彦

と詠まれたという。もって母への思慕の深かったことを知るのであるが、二年後芳淳また浄土へと旅立たれた。

十四日は当麻奥の院で来迎会が修せられ、廿四日は古知谷で開山忌がつとまる。寺伝によれば寛弘元年（一〇〇四）恵心僧都源信が弟子の寛印とともに当麻寺に詣でたとき、中将姫の織られたという当麻曼荼羅を見て感激し、翌二年三月中将法如の示寂の日に来迎会を行ったのが、来迎会のはじまりであるという。東楼門の側の娑婆堂から、真西の曼荼羅堂にかけて、およそ三十間ばかりの橋をしつらえ、往路は天人二人に竜樹菩薩を加え二十八部衆が娑婆堂に来迎におもむき、帰路は観音勢至両菩薩を先頭に、生身往生したという中将姫法如の興がつづいて行道する。一歩すすんでは半歩退くという、手ぶり足ぶりおもしろく姫を浄土へみちびく歓喜のさまを示したもので、この種の来迎会は平原十念寺をはじめ、奥沢九品仏などにも伝えられており、九品仏では八月におこなわれている。旧来は姫の忌日である三月十四日におこなわれていたが、新暦に代った今では草木の崩え出する

暖かな五月に修するようになった。

古知谷の開山忌は、阿弥陀寺を開いた彈誓上人の忌日につとめる法要で、上人は布木綿紙子を身にまとい、松の実、甘皮を食べて山野に修行したという。

分けのほる麓の道は多けれど

同じ高嶺の雪を見るかな

仏教には八万四千の法門があるといい、又数多の宗派があるけれども、それらの宗祖たちは釈尊をどのように受けとめ開宗したのであるうか。多くの祖師たちは、真にあるべき教団をつくるために、「釈尊にかえる」ことを目的として意欲的に教団づくりをなされた。と同様に宗団内にあっても、「宗祖にかえれ」をスローガンにかかげて活躍された人も少なくない。専修念仏によって宗団に新しい意吹きをあたえようとし、持律によって宗団の再生をはからんとした僧もあった。彈誓も、念仏をひろめることによって、法然上人が一生をとして宣布した念仏を世に弘めようとなされた。かくて教化の及ぶところ、「国中に普くして、念仏申さぬ人もなく、名号かけぬ家も希れ」なほどであったという。

法然上人の出現

鈴木 成 元

（大正大学講師）

歴史学上における伝記の扱い方は非常に困難である。伝記の多くは弟子・友人など、故人を尊敬し偲ぶ人々によって作られるため、大きな主観を働かせて必要以上に美化されているのが常である。中でも僧伝などは、後世さらに修飾を重ねてゆくため、とんでもないものができ上ってゆく。法然の伝記にしても日蓮の伝記にしても全く同じことがいえる。

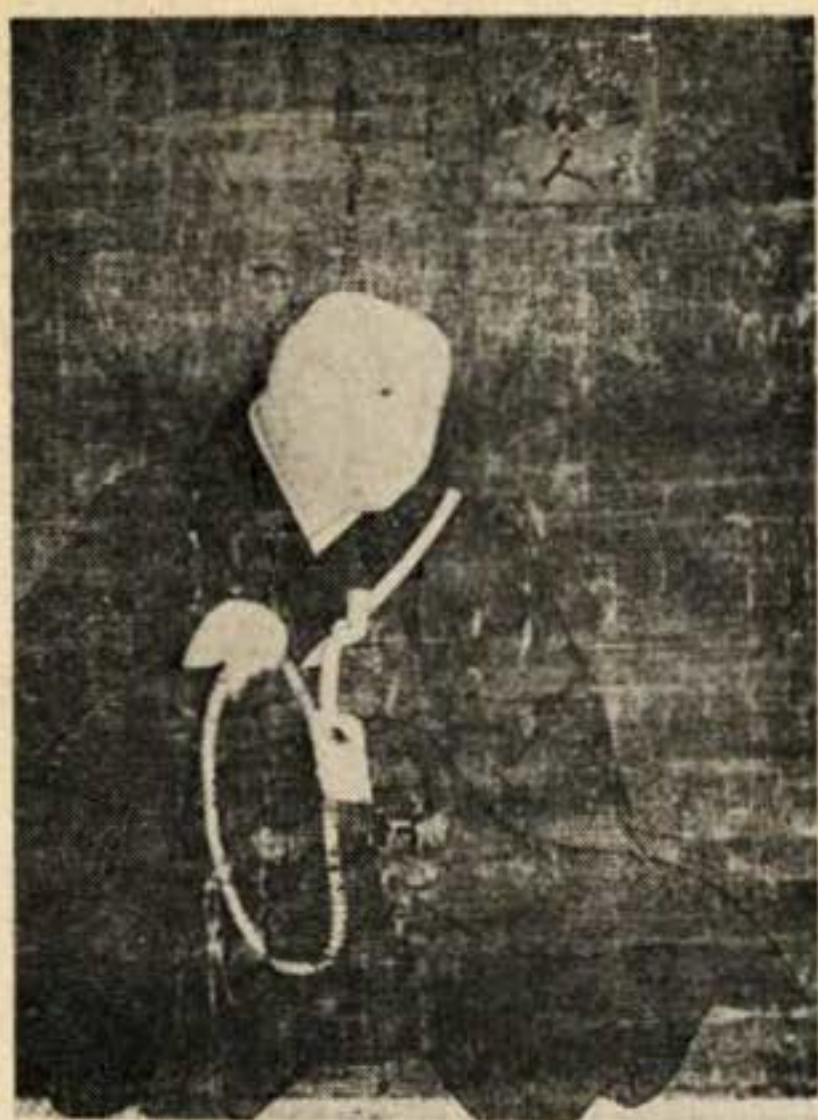
このような場合私はできるだけ自分の位置で、つまり偉い人は下げ、下の人は自分の位置まで上げて考えることにしている。それでないと血の通った考察はできない。そんな点から私なりの法然観をのべてみたいと思う。

法然は長承二年（二三）美作国（岡山）久米の押領使であった漆間時国の息子として生れた。父時国は今でいえば警察署長であり、当時は地方家族の一人で勢力家であった。しかし職業

上かなりの反感を持たれていたらしい。保延七年（二四二）の春明石定明の夜襲を受けて、父を失うことになった。時国は臨終に際し法然を呼び、敵をうらむことなく出家して自分の菩提を弔ってくれ、と遺言したという。それを守って法然は出家したことになる。当時における日本国は、今考えるような国家らしい国家ではなかった。中央政權とは別に独立した政權が沢山あり、庄園の拡張維持をはかっていたのである。時国の場合も小規模ではあるが戦争に負けたのであり、負ければ一族は殺され財産は没収されることになる。幸い死はまぬがれた法然ではあるが、財産がなければどうして生活するところができようか。残された出世コースはただ一つ僧侶になるより他に道がなかったといえる。父時国の遺言はそれをよく物語るものであり、生来すぐれた法然は教えに従って菩提寺

の觀覺得業の室に入り、やがて当時の大学である比叡山へ上り、源光・皇円・叡空の教えを受けることになるのである。

高僧について真理の探求につとめた法然ではあったが、どうしてもつかむことができず、やがて叡山を上り、嵯峨の清涼寺をはじめとし、南都に遊学し、藏俊・寛雅・慶雅に教えを乞うた。しかしどの教えにも満足することはできない。そこで再度黒谷にもどり報恩蔵に入り『一切経』を読むことになった。たまたま承安五年(一二七五)の春、善導の『觀經疏』を読んで救いの確信を得られ、一向専修の念仏門に入られたのである。そして黒谷を去り東山吉水の庵室に移られた。法然の教えは、いつでも誰でも、どこでも「南無阿弥陀仏」と念



(法然上人像 金戒光明寺蔵)

仏を称えることによって、平等に救われるというのであるから、出家といわず、在家といわず、裕福な人も貧しい人も老若男女を問わず庵室を訪ねるものが多くなったという。こうして従来の貴族仏教から庶民仏教へと大きな変化がおとずれたのである。

今まで浄土教の流行をとくときは必ず保元以後の戦乱・天災地変の連続をあげ、この間に源平両氏の盛衰興亡によって貴族から庶民にいたる禍福の変転と末法思想を結びつけている。そして人心はいよいよ不安を招き、現世を穢土と感じ、極楽往生をねがうものが多くなったといっている。しかし源平戦争がなくなるとも有為転変の世の中である。どんなに平和なときでも人間には生死の問題がつきまとうのである。だから戦乱でなくとも浄土思想は起りうるものであり、たまたまタイミングがよかったために、法然の新仏教により一層普及する結果になったのである。けれども新仏教がでたために、旧仏教がすたれたと思っではならない。新と旧とはその対象と地域が異なるのみで、旧仏教は依然として勢力を持っていたのである。

それはともかく、法然には信空・感西など常侍の弟子ができ、文治のころになると大原で談義を開くことになる。これには貞慶や高弁も出席し、法然は旧仏教の僧を論破したよう

に伝えているが、実際には顕真が中心となり、法然と関係のある僧が加わった談義であつたらしい。しかし文治六年（二〇）になると、法然は重源の招きで東大学に『三部経』を講じることになる。これは法然の教義が僧侶から注目を受けるようになったことを物語るものである。事実この前年、九条兼実が法然に浄土の法文を尋ね、翌年には授戒し、熱心な檀越になるのである。そしてこれを機に法然は活発な行動を起こし、公家・武家をはじめ、多くの弟子と信者をうるようになるのである。

沢山現存する法然像はデブブリと肥り、何処となく大らかな感じを与え、一見丈夫そうに見える。そこで従来から浄土宗では大部分のものが勝れた健康状態であつたように記している。しかし私は、法然は見かけよりは弱い体質で、腺病質ではなかつたかと思う。伝記の中で、法然が病気がちであつたといっているものはない。しかし僅かな記事ではあるが、語録に表われた面から判断すると病弱であつたといつても過言ではない。経済的には何不自由のない生活をしていたと思われる法然ではあるが、病気にはかなりの神経を使っていることがわかる。流罪のときまで、一步も京都を出なかつたのもこの肉体的・経済的な事情を裏かきするものであろう。法然の病気は風邪・瘧病・老衰などがあげられるが、それぞれ

に大きな価値をもつものであつた。

法然の代表的な著作『選択集』は九条兼実の要請で撰出されたといわれる。それも一理はある。しかし兼実が所望する原因となつたのは、建久九年（二九）の正月からひいた風邪がこじれ、大病にまで進んだことにより、このとき法然は遺言状まで書くのである。そのような法然を眼前にした弟子達にすれば、やはり法然の身代りとなる『選択集』を所望したことであろう。ぼつぼつ異端を称える弟子も出てきているので法然自身も書くきになり、それらが総合されて『選択集』の撰述にふみ切つたと考えられる。

また瘧病というのは日本古来のマラリヤで、鎌倉時代にも相当流行したようである。法然もこれにかかり苦しんだらしい。しかしこのために弟子達は互に師の状態を心配し、たえず横の連絡をとり、見舞状をはじめ小袖など見舞の品々をとどけている様子がわかる。欣西などは法然の形見にしようとして仏像まで作っている。ここには従来全く知られなかつた、人間の心と心のふれあいを感じられる。そして弟子達が真から傾倒した法然像を大きく浮かび上らせることができるのである。

法然の名声が高まるにつれ、旧仏教を破壊するかのよう誤解するものも出た。そこで叡山や南都の諸寺から圧迫を受

けた。たまたまそこに住蓮、安樂の事件がおき、また法然に對する無理解も手伝って、専修念佛教団はますます執拗な禁断を強訴された。最初はほとんど問題にしていなかった朝廷ではあったが、ついにこれを受け入れなければならない立場になり、ついに法然は土佐県(四)に配流されることになった。別れを惜しむ門弟達に法然は「自分の配流をうらんではいけない。考えてみれば片田舎の人に念佛をすすめることは自分のねがうところである。だからかえって朝廷の恩に感謝しなければならぬ」といってなぐさめたという。

承元元年(二二七)春まだ浅い三月十六日、法然は鳥羽から船にのり淀川を下り、翌日は経ヶ島、更に高砂・室の津を経て四国に上陸した。しかし法然の場合は配流といっても日蓮のような苦しいものではなく、今でいえば大名旅行にも相当するものではなかったろうか。いずれにしても同年の八月には許しがでて摂津の勝尾寺に入り、入洛を許されるまでの四年間を過すのである。このとき寺僧の法服が破れていたの
で法然は京都にいる信空に命じ法服を寄進させ、また自分



(朝もやにけふる知恩院御影堂)

の、『一切経』を寄附したという。しかしこのころになると、もう老衰がはじまっていたらしい。耳は遠く、食事も通らない日があったという。やっと入洛の許しが出たのは建暦元年(二三二)十一月十七日、早速東山の庵室にゆかれたが、翌年正月二日から病床につき、同二十五日八十歳の高齢で入寂されたのである。

法然は入寂する二月前、枕元にいた源智に「一枚起請文」を授けたといわれる。浄土宗の奥義を一紙にしたためた名文であるが、これは法然の七十歳ごろからできていたものであり、多くの弟子達に口伝されていたものと私は思っている。最初はどこちないものであったか、入寂するころの十年間には歯切れのよいこのような形になったもの

と思う。

それはともかく、法然の死を眼前に専修教団はより結束する態勢を固めるのである。

== 新 刊 紹 介 ==

悲しめる者のために

みどりと白砂はかがやき

苦しみ生きんとする者のために

ああ 石は語る

信仰は理窟ではなく体験である

という言葉をよく耳にする。その人

の血肉にながれ

た体験を通して

語られる言葉

は、聞くものの

耳目をひらき心

の奥底ふかくし

みいつてくるも

のである。布教伝道も単なる話術ではない。

みずからの信仰体験を通して語られる告白で

なければならぬ。

著者が布教に志したのは故あつてのこと

ある。父が説教の高座において病にたおれ、

五十三才で往生の素懷をとげ、殉教の父のみ

たまの前に、布教一途に生きると決意をした

布教伝道生活を迎えて、記念に出版されたのが本書である。

信仰随想としてあるが、それは単に著者の

懐古であつたり思い出のまとめではない。著

者が高座で語つたものの蒐録でもない。著者

が独りの人間として跪きころび、よろめきな

がら一步一步人生を歩み、道を求めていく赤

裸々な人間の告白であり、ギリギリの信仰の

遍歴である。

現代人が、教養としての仏

教なり念仏信仰をみちびく手

だてとなればよろこびであ

ると語る著者ではあるが、も

っとも人間のもっている心の

奥底の叫びを通して、真実の

人生を語りかけてくる、えがたい

信仰書である。

六字の石庭

——信仰随想——

小布施弘学著

長野市元善町

善光寺大本願白道会 発行

新書判二一〇頁

価二〇〇円
三〇〇円

新 会 員 紹 介

東京都大田区田園調布四丁目

秋元けい子

神奈川県中郡大野町八幡

寺尾 弁瑞

茨城県水海道市高野町

沼尻 茂

〃 〃 諏訪町

片岡 長吉

長野県埴科郡松代町東寺尾

小布施弘学

新潟県西蒲原郡巻町大字福井

塚本 譲

青森県西郡深浦町字関

浄安寺

大阪市南区瓦屋町一の十一

秋本 清

大阪府守口局区内大日町

西向寺

北九州市八幡区上々津役足水

植木 茂

福岡市下洲崎三八

新森 耕爾

〃 姪浜町宮の前町

吉岡 恒雄

高松市西浜新町

西方寺

宮崎県串間市今町

(支部) 常照寺

鹿児島県揖宿郡山川町大山

吉川智恵子

編集後記

▽青葉若葉の新緑すがすがしい季節である。

去る四月十五日桜花散乱するなか、大本山増上寺の御忌会が盛大におこなわれた。大正大学浄土宗青年会の学生諸君も大挙奉仕にでかけ伝道布教をおこなった。椎尾法主の九十老軀かくしやくとしての大導師に参詣の善男善女は随喜合掌していた。

▽編集部には色々の御注文をいただくが、仲々意に任せず、今一番心がけていることは一般信徒への教化誌の使命を果たすための労苦である。会員諸師のよきお智恵をいただきたいもの。

▽その意味からして、宝田正道先生の仏教人生訓は好評である。

▽鈴木成元先生の日本浄土

教物語を大変興味深く読んでいるという会員の方の便りの中で、一般の人には一寸むずかしいかもしれないが、新しい宗史のページを開く意味で頑張ってくださいというものである。

▽法然上人鑽仰会も創立されて本年は満三十周年になる。今秋には記念行事を計画している。同人の佐藤密雄、佐藤良智、中村康隆、竹中信常、村瀬秀雄の諸先生方もいよいよ健在で、本会護持に努力されている。先日にも久々佐藤賢順先生を偲ぶ会を催し、浄土の還来を語りあつた。

編集同人の安居香山先生がこんど大正大学助教授になられた。学生課長も仲々忙しい仕事らしいが、山積みの中の仕事をうずくまっつてコツコツ研鑽した業績が認められたもの。

▽高橋良和先生の近世交名録は毎月待ちどろしく楽しみにしているとの声を聞く。その当時が懐しく回想されるばかりでなく、貴重な近世の宗史をつづるものでもある。

▽藤井実応先生浄土「信仰問答」しばらく筆を休めてまたとのお便り。御多忙な先生ゆえ残念だが、一日も早く続篇御執筆をお願いしたい。▽編集人の水谷哲雄氏が過労のためしばらく静養している。そのため浄土の発送にも支障をきたし大変御迷惑をおかけしている。次号より平常にもどる予定。

▽参議院選挙も真近くなつたが、最近会員になられた大田区の秋元朝吉氏は、「浄土」を宣伝しながら、大いに折伏の折伏をおこなっているとのこと。たのしいことである。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年四月二十五日 印刷

昭和四十年五月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区根田町一ノ二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

梵鐘のトップメーカー
日本一の技術と伝統

老子の名鐘



梵鐘その他銅合金
記念・贈答用美術鋳物調整承
池上本門寺大鐘 香取正彦作

文紋彫刻技術指導
梵鐘界の権威
香取正彦先生

音響指導
青木一郎先生

鋳物師
老子次右工門

昭和三十九年九月 謹鋳
口径一・六メートル重量七トン

株式会社 老子製作所

本社 富山県高岡市横田511 電話 ② 0258
大阪連絡所 大阪市北区曽根崎上1-1 電話 (341) 8847
大阪支店は電電公社の接收のため上記に連絡所を開設しました御利用願います

香りたかき浄土トラクト 一既刊一

選択集私解	大正大学教授 竹中 信常著	新書判 価 120円 120 P 下 30円
一枚起請文をめぐって	村瀬 秀雄著	新書判 価 120円 102 P 下 30円
真理のはなたば	大正大学教授 佐藤 良智著	新書判 価 70円 下 20円
日常勤行式の解説	村瀬 秀雄著	新書判 価 100円 90 P 下 20円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順著	B 6 判 価 15円 16 P 下 10円
こ法語のしおり 葵ぐさ	村瀬 秀雄著	B 6 判 価 15円 16 P 下 10円
浄土宗のおしえ	大助 正教授 宮林 昭彦著	新書判 価 25円 20 P 下 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944
振替 東京 82187